聖　書：創世記 28：10〜22
説教題：はしごが地に
日　時：2024 年 1 月 28 日（朝拝）

最初の 10 節に「ヤコブはベエル・シェバを出て、ハランへと向かった」とあります。なぜ彼がハランへ向かったかについては前回のところに書いてありました。ヤコブは神の契約を担う者となるという祝福が欲しくて、兄エサウが野に出かけている間にエサウになり切り、年老いて目が良く見えなくなっていた父イサクを騙し、その祝福を受けました。その後まもなく兄エサウは自分が出し抜かれたことを知って怒り、ヤコブを殺してやる！と考えました。このことが母リベカに伝わり、彼女は遠い自分の出身地ハランへ逃げるようにとヤコブに指示しました。こうして彼は突然家を出て行かなければならなくなったわけです。ですからこれは楽しい旅ではなく、逃亡の旅でした。ヤコブは家の近くにいるのが好きな人でした。兄エサウが野の人であるのと対照的に、穏やかな人でいつも天幕にいるような人でした。その彼が家から追い出されて突然厳しい環境下に投げやられることとなったのです。いつ後ろからエサウが追いかけて来て、自分の身に危険が及ぶか分かりません。果たしてハランの地などにたどり着けるのでしょうか。

11 節で彼はある場所に着き、そこで一夜を明かすことにしました。「ちょうど日が沈んだからである」とあります。つまりここは彼が予定した宿泊地ではありませんでした。今日はもうこれ以上進めないから、ここで休むしかないという場所でした。彼はそこで石を取って枕にしました。これまで住み慣れた安全な場所で過ごして来た彼にとって、これは何とわびしい気持ちにさせられる状況だったでしょう。石は固くて夜はもちろんひんやりしていたでしょう。そして同じように冷たい地面に身を横たえるしかありませんでした。加えていつ野の獣に襲われるか、いつ盗賊に襲われるか分かりません。こうして彼は思ってもみなかった状態に投げ込まれたのです。イサク家を継ぐ祝福を自分の手でつかみ取ろうとしたことが裏目に出て、彼は家を出て行かなければならなくなったばかりか、すべてを失ったような状態へと投げ出されたのです。しかしこんな状況で彼は神の現れに接します。ベエル・シェバからハランまではかなりの距離がありましたが、その長旅において唯一記されているのが今日の箇所の出来事です。これは今後の彼の歩みにおいて大きな意味を持つ出来事であったからに他なりません。

彼はその夜、夢を見ました。すると、見よ！一つのはしごが地に立てられていました。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていました。これは何を意味するのでしょうか。それはヤコブのいる場所と天はつながっているということです。思い起こすのは創世記 11 章で読んだバベルです。あの時、人々は互いに集まって、頂が天に届く塔を建てて名を上げよう！としました。しかし神によって混乱させられ、その試みは頓挫させられました。これは人間の力で、人間の側から神に近づき、神に届くことはできないことを示しています。それと対照的にここでは天から地に向かってはしごがかけられました。人間が知恵と力を結集しても実現できなかったものが、神の側から一方的に与えられました。しかも何の働きもしていないヤコブに対してです。その資格などないような彼に対してです。ここに神との交わり、神との交流は神の側から一方的に与えられるものであることが示されています。人間が偉くなり、人間の力を集めて天に届くのではなく、神が恵みにより、与えてくださるものなのです。

そのはしごを天使たちが上り下りしていました。ヘブル人への手紙 1 章 14 節 :「御使いはみな、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣わされているのではありませんか。」　ヤコブはこの寂しい場所で、自分は一人ぼっちと思っていましたが、そうではなかったのです。何と天使が天と地を行き来して神の祝福をヤコブに運ぶ奉仕をしてくれていました。しかもここに「上り下り」とあります。ある人は「上る」という言葉が先にあるということは、ヤコブが先に見たのは天使たちが上る姿であり、このことは御使いたちがすでにヤコブとともにいたことを暗示していると言います。とすればヤコブが気付かなかっただけで、すでに天使たちはヤコブのそばで仕えていたことになります。そこはさみしい場所にしか見えませんでしたが、霊の眼が開かれるなら、そこには天使たちによる守りと支えがあったことになります。

この光景がヤコブに示されただけではなく、続けて主からの言葉もありました。13 節に「そして、見よ、主がその上に立って」とあります。そのはしごの上におられる主がこう語られました。13〜14 節 :「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北

へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」　これはこれまで見て来たアブラハムへの約束と同じです。アブラハム、イサクと継承された約束が、今度はヤコブに繰り返されています。その内容はこの約束の地をあなたとあなたの子孫に与えること、またあなたの子孫を大いなるものとすること、そして地のすべての部族はあなたとあなたの子孫によって祝福されるということです。しかしこれは本当にヤコブに当てはまるのでしょうか。彼は今、この土地から離れ、ここから出て行こうとしています。また彼は結婚していません。そんな私に本当に地のちりのような子孫が与えられるのか。ましてや世界の祝福の基になることなどあり得るのか。そんな彼の心配を払拭するかのように主は 15 節で次のように言われました。「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」　ヤコブはこれからこの地を出て行きますが、主はどこへ行ってもあなたとともにいて、あなたを守ると言われました。そして必ずあなたをこの地に連れ帰ると約束されました。それまでわたしは決してあなたを捨てない！と確約されました。ある人はこのような約束を受けたヤコブを見て妬ましく思うかもしれません。自分勝手に歩んで来たヤコブなのに、このように言っていただくなんてずるい！こんな祝福を受ける資格などない者なのに、と。もし私たちがいくらからでもそのように思い、憤慨するなら、それは聖書が語る恵みのメッセージをまだ良く受け止めていない証拠です。後で少し触れますが、聖書における恵みのメッセージを良く受け止めている人がここに見るのは、このヤコブは私そのものだということです。ここで神がヤコブにしてくださったことは、神が私にしてくださっていることと同じである。そのことを見て取って一層神をほめたたえるように導かれてこそ、この箇所を正しく読んでいる人です。

　さてヤコブはこの主の現れに対してどう応答したでしょうか。彼は 16 節で眠りから覚めて、こう言ったとあります。「まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」　彼は昨晩、身を横たえて眠る時は、ここをただの寂しい場所と思っていましたが、そうではありませんでした。私は気づかなかったが、ここは主がおられる場所である！と彼は言いました。そして恐れて言います。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」朝が明けると彼は自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱、記念碑としました。神の恵みを覚え、神を礼拝するためです。その柱の頭には油を注ぎました。ここを聖

なるところとして覚えるためでしょう。彼はここをベテル、すなわち神の家と名づけました。

そして誓願を立てます。ある人は20〜22節のヤコブの言葉を神との取引と見ます。ヤコブはここでもずるい性質を発揮している、と。しかしここは取引ではありません。この彼の言葉は 13〜15 節の主の約束を受けて語られたものです。ですから主がヤコブを祝福してくださることはすでに決まっています。ヤコブはその主の祝福を感謝し、信じて、私はこうします！という彼の応答をここで述べているだけです。彼はこの神の約束を感謝して、この場所を礼拝の場とします、また自分がこれから受けるすべてのものの十分の一を必ずあなたにささげますと誓ったのです。

ここに彼の大きな変化を認めることができます。ヤコブはこれまでつかむ人、生まれた時に兄のかかとをつかんで出て来たように、自分の力で祝福をもぎ取ろうとする人、奪い取ろうとする人でした。その彼がここで逆に自分から何かを差し出す人、与える人に変わっています。これは神の恵みにあずかった人に現れる変化です。神の恵みを知った人は、そのままではいられません。受けた恵みを感謝して、自分もささげたい、自分も応答したいと導かれます。沢山恵みを受けたと自覚する人は、その度合いに応じて自分も応答してささげたい、その感謝を表したいと必ず導かれるのです。つまりヤコブはここで初めて本当の意味で恵みの神と出会ったのです。その神の恵みは彼に影響を与えずにいなかったのです。奪うことに熱心だったヤコブがここで喜んでささげる人になっています。このような変化を神の恵みはもたらします。もちろんこれでヤコブのすべてが変わったわけではありません。彼の生まれながらの性質はこれからも彼の中に根強く残り、色々な場面で顔を出すことを私たちはこの後、読みます。しかしヤコブはここで初めて恵みの神を知り、その神に答えて歩む本当の人生に出発したのです。

以上の箇所から以下の二つのことを学びたいと思います。一つはヤコブは今日の箇所で、ある意味で初めて神と真に出会いましたが、それはどんな時だったかということです。それは彼が人生の谷にいた時でした。彼が挫折した時、一人で野に放り出されて、どこにも助けがないと思われた時、すべてが失われたと思われた時でした。実にそのような場こそ神に出会う場であるということです。神を個人的に知るヤコブの祝福の歩みはここから始まります。ですから私たちも自分がどん底にあるように思わ

れる時、それで希望を投げ捨てることがないようにしたいと思います。私たちのすべての挫折よりも神の恵みは大きいのです。自業自得で倒れた私たちを神は立たせ、真の力に満たし、祝福の人生へ導くことができます。それまでのように自分の力により頼むのではなく、ただ神の恵みにより頼み、神を自分の力として歩む人生へと神は導いてくださいます。その神に望みを置き、今日も語りかけていてくださる神の御言葉に聞いて、恵みの神に導かれる人生へと進む者たちでありたいと思います。

もう一つは神は天からはしごをかけてヤコブを守り、祝福くださることを示されましたが、そのはしごは何を指すかということです。ヨハネの福音書 1 章 51 節でイエス様はナタナエルとの会話において次のように言われました。「まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見ることになります。」 イエス様はここで明らかに今日の箇所の天からのはしごを念頭に置いて語っておられます。そしてそのはしごはご自身を指すと言っておられます。まさにイエス様こそ天と地をつなぐはしごなのです。神は私たちを憐れみ、私たちを祝福するために、御子イエス様を送ってくださり、この方においてご自身と私たちを結んでくださいました。イエス様は私たちの罪を引き受けて、私たちの代わりに十字架上で死んでくださり、より頼む私たちの罪が神の御前に赦され、私たちが神に受け入れられるようにしてくださいました。このイエス様という通路を通してこそ、神の祝福は私たちに注がれます。ヨハネの福音書 14 章 6 節 :「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。』」

先に触れた通り、今日の箇所におけるヤコブは私たち一人一人のことです。神から離れ、自分の力で生きようとし、それが行き詰まり、その根本にある自分の罪のために災いを刈り取って当然の者たちです。しかし神は天と地をキリストにあってつないでくださり、この方にあって私たちを祝福してくださいます。救いは私たちの方からバベルの塔を築くことによって獲得するものではなく、神が恵みによって私たちに与えてくださるものです。神はキリストというこの天と地をつなぐまことのはしごを通して、私たちとともにいてくださり、私たちを守り、救いの約束が最終的に実現する日まで私たちを見捨てずに導いてくださいます。私たちはこの神がくださった救いのはしごを見上げてヤコブとともに驚き、恐れ、賛美をもってこの恵みの神により頼むいな歩みへ進む者でありたいと思います。そしてこの神の恵みの大きさに押し出され

て、自分自身の感謝と献身の思いを自分が持てるものを献げることを通して表し、恵みの神と益々豊かに結ばれ、その神にお答えする真の祝福の道を行く者へと導かれたいと思います。